

滋 賀 県

谷 口 林 業



滋 賀 北 部 森 林 組 合

位置

谷口林業地は、滋賀県の東北部の長浜市谷口町（旧東浅井郡浅井町大字谷口）地方にあり、旧村名を田根村と言ったことから田根林業とも呼ばれている。しかしながら、谷口集落独特の林業経営はこの地域に限られており田根林業と呼ぶことはふさわしくないと考えられる。

この谷口集落の東南には県下の秀峰伊吹山や七尾山があり、西側には戦国の武将“浅井長政”の居城となった小谷山を望むことができる。



◎アクセス

- ☆JR 東海道新幹線「米原」駅から車で約40分。
- ☆国道21号線より国道8号線に入りJR北陸線「長浜」駅から車で約20分
- ☆北陸自動車道長浜ICより車で約15分
- ☆JR北陸線「虎姫」駅から車で約10分

自然条件

当地域は、伊吹山系に囲まれて小盆地の中にあり、森林は海拔200～500mの範囲にある。山地は、秩父古生層に属し基岩は砂岩、角岩、粘板岩よりなり、土壌は表土が深く肥沃な林地である。

年平均気温は13.5℃で降水量は2,000mm以上ありスギの生育に適している。

雪は11月下旬より3月上旬にかけて降り、平均積雪量は1m以内である。しかしながら、当地域の南南東に位置する伊吹山の影響を受けて、水分を多く含んだ湿雪が降ることからしばしば降雪による冠雪害を受けやすい。



谷口集落を望む



谷口の集落の家並み

経営の特徴

1) 太径木の用材生産

谷口林業は、択伐林経営を行うべくして森林施業を計画的に実施してきたわけではない。各森林所有者の経営規模からして必然的に行われてきた結果である。必要量のみを伐採し、その伐採跡地に数本の自家養苗した大型苗木を植栽してきた。その結果が、今日の林相を形成したもので択伐といわれる谷口独特の林業である。

2) 小規模経営

谷口集落は現在40数戸の農林家があり私有林147ヘクタール余りにはほとんどスギが植えられている。従って、1戸当たりの平均所有面積は3.0ヘクタール前後と林業経営というほどの規模はない。最大でも約10ヘクタールの所有規模である。(他に共有林が88ヘクタール)

3) 高蓄積の備蓄林業

私有林の約9割前後を占めるスギ林の蓄積は、約11万6千立方メートルに達しており、年平均生長量はヘクタール当たり28立方メートル見込まれている。

しかしながら、近年は材価の低迷も影響し伐採はほとんど行われることはなく蓄積は増加の一途にある。



4) 造林技術

① 苗木

品種系統

さし木品種として、タロウエモンスギ（田根1号）・オオスギ系（田根2号）が用いられる。その形状からみてウラスギ系の特徴が認められる。当時、この地域に自生するスギがつけだされ、その中から選び出されたものと言われている。

二つの品種の特性は次の表のとおりである。いずれも耐雪・耐陰性が強く択伐林仕立てに最適の品種といえる。

品種別特性表

特性 \ 品種	タロウエモンスギ（田根1号）	オオスギ系（田根2号）
葉色	薄い（黄味）	濃い（濃緑）
針葉の形状	短い やや内側に曲がる	長い 内曲がり
樹皮	赤褐色・細く縦に裂ける	濃赤褐色・細く縦裂
品種固定時期	200年前	50年前



② 植栽と保育

苗木は、大きいさし木が用いられる。伐採後の植え付けということで植え付け本数が少ないためほとんど各戸で苗木が養苗されていた。近年は伐採される林家はなく養苗はされていない。さし穂は3年生の枝を約30-40cmに切ったもので山裾の田の畦畔をさし床として利用する。2年後の春に床替えし更に大きく仕立て山行き苗とする。（他に青ざしと呼ばれる挿し木も作られることもある。）

豪雪地帯であるため、雪起こしは添え木を使い全植栽木に行われている。近年は伐採が行われないため雪起こし作業は行われていない。

③ 枝 打

谷口林業は、林地を有効に活用するために、上層木は極度に枝打ちを行う。これは、下層木に陽光が入って成長を促すことと、末落ちの少ない年輪のそろった長材を作り、単位面積当たりの生産量を増し、高い立木価格で売ることによって主眼がおかれている。



植栽後12～15年目に1回、20～23年に2回目を、その後数回の枝打ちを行い、40年以降も続けられるという強い枝打ちが行われている。

枝打ち用具には、足掛け縄（径7mm、長さ5mの麻縄）ガニ（足の滑り止めのため鉄製で作られた木登り用具）、手斧（刃渡り11cm、重さ約0.6kg）が使われている。

谷口林業の枝打ち基準

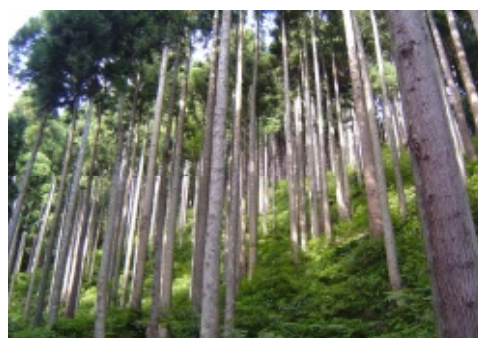
	見込樹齢	平均樹高	枝下高	枝下見込直径
第 1 回	12～15	8m	2.5m	4.5cm
第 2 回	20～23	10m	4.5m	6.0cm
第 3 回	30～35	14m	8～10m	7.0cm
第 4 回以降	樹の生長に合わせて実施			

谷口における径級別、本数、材積配分表

径級別 (cm)	6～14	16～28	30～44	46～58	60～66	計
本 数 (本)	47	102	54	29	8	240
平均樹高 m	11	22	30	30	39	—
材 積 m ³	3,389	37,419	68,565	87,037	37,767	2,342
本数 (本) /ha	252	546	289	155	43	1,266
材積 (m ³) /ha	18,089	200,376	367,356	466,431	212,899	1,265

④ 間 伐

昭和50年代後半までは大面積の植栽は行われず小面積での植栽が行われていた。これは、地元精英樹より採穂したさし木が自家苗として養苗されており数量的にも限度があったためである。従って、取り立てて間伐作業を必要としなかった。



また、択抜林業が谷口林業の主流を占め植栽本数も1箇所当たり数本植えられただけで間伐作業は行うことがなかった。

しかしながら、50年代後半より大面積拡大造林は地元森林組合（滋賀北部森林組合 浅井事業所〔旧東浅井森林組合〕）が担当しており、以後の間伐は森林組合がほとんど行っている。

⑤ 主 伐

谷口集落の農耕面積は約15ヘクタールで1戸当たりの耕作面積は0.4ヘクタールと極めて少なく、平常の生活費は給与収入により賄われている。このことは、近隣集落

よりも1世代早くから給与生活が始まっている。従って、今日では親子孫3代と給与生活が行われていることから余程のことがない限り伐採されることはない。このため、蓄積は増加の途をたどっている。



伐採前のスギ太径木



伐採されたスギ 樹齢 290 年

最後に

谷口林業の歴史はほとんど残っていないが、徳川時代にはこの谷口集落だけが天領であって、他の集落は浅井藩であったため、その当時の伐採が厳しく制限されていたのがこの種の林業のもととなったと考えられる。

もう1つは、岐阜県関ヶ原の今須林業と何か関係があったのではないかと、距離的にも割合に近く、この両集落に何か交渉があったのではないかと推測もある。

谷口集落近隣にもスギを主体とした林業経営が行われているが、それらは皆伐が普通である。これらの集落の林業、農業その他の関係を比較検討してみても谷口集落との差は甚だ少ない。農林地の所有および双方からの収入は極わずかで、そのつり合いの差がヌキ伐り林業と皆伐林業とを分かれさせたとは思われない。

また、谷口集落に何故このような林業が発展したか興味のあるところであるが、谷口の山は見事であるということはこの地方では話題になっていた。このような独特の林業形態が広く全国に紹介されたのは昭和28年頃京都大学の佐藤弥太郎博士が調査されてからのことである。

しかしながら、昨今の木材価格は目を覆わんばかりの低迷が続いており伐採はほとんど行われていない。現在では多分に漏れず山林の撫育に携わる篤林家はほとんどいなくなり森林組合への委託造林が主流となっている。このため、脚光を浴び続けてきた択伐林としての林層は減少傾向にあり単層林へ移行しつつある。

こうした傾向に危機感を持つ谷口地元住民は、伝統ある谷口林業の火を消さないよう60歳台の在宅者が集落中堅の若者達（呑クラブ？）とコミュニケーションを高め指導を行っている。

ちなみに、最近森林組合が委託を受けて取り引きした標準的な谷口スギの市場価格は次のとおり。

元 玉	末口 5.2 cm × 材長 5.0 m	170,000 / m ³	
2 番玉	末口 4.2 cm × 材長 4.0 m	95,000 / m ³	1 本当たり 435,000 円